

憲法現実にこだわる 憲法の正統派入門書

1 本書の概要

本書は、憲法についての『「18歳から』という、年齢にターゲットをしばった入門書』である。総論、人権論、統治機構論の計39テーマについて、1テーマ横書き見開き2頁（まれに4頁）で問題提起をし解説をしている。右側のページの下の部分には写真や図が置かれ、読者の関心をひく工夫がなされているとともに、各ページの外側の部分には注が付されており、概念等についての説明が施されていて、読者の理解を助けている。本書は、憲法の現実にこだわりつつ、オードックスに憲法を解説する、優れた憲法の入門書である。

2 憲法現実への着目

本書の特徴は、なんといっても「憲法規範を生きた現実のなかで捉えなおすという方法」がとられていることである。とかく憲法の入門書は、憲法についての概説的な（初心者である読者からすれば無味乾燥な）記述になりがちである。しかし、

日本の、いや世界の現実を踏まえて憲法学を展開する水島朝穂教授が書く憲法入門書は、そんな概説書ではない。

水島教授は、学生時代から新聞の切り抜きを欠かさず、憲法学者の視点からの新聞批評を出版している。水島教授が憲法現実にかかわる現場に足を向け、関係する物を収集し、写真を撮っているだけでなく、水島ゼミでは、夏休みに北海道や沖縄で憲法に関するリサーチ旅行をしている。本書に使用されている写真はすべて、水島教授や水島ゼミ関係者が撮った写真であるという。水島教授は、こうしてメディアを通じて、そして、自らの足で得た情報を踏まえて、憲法現実に対する発言を常に積極的に行ってきた。

そんな水島教授が執筆する本書では、各章の冒頭に

はまず憲法にかかわる具体的な事件・事象がジョーク（または皮肉）を交えながら挙げられ、そこから憲法の理論、憲法解釈の話へと進んでいる。この「つかみ」の部分が、読者をひきつけ、本書を読みやすく親しみやすいものになっているにちがいない。それだけでなく、憲法の理論、憲法解釈論は単なる理屈ではなく、現実を背景にしており、現実を憲法の理想に照らして解決するためにこそ存在するのだということを、読者は自然と理解できるであろう。

3 オードックスな解説

本書は、憲法に関する具体的な事件・事象を挙げることに続けて憲法の理論、憲法解釈論をコンパクトにはあるが、（意外に？）オードックスに展開している。この本書の解説の理論的なレベルはかなり高い。特に注では、三段階審査、エンドースメント・テスト、「行政権」についての最近の論争といった最新の理論動向にまで触れられており、入門書としては「やりすぎ」の感がないではない。

この解説の部分は、導入の部分との落差が大きく、読者は難しく感じるかもしれない。しかし、

入門書であっても、憲法の理念と憲法現実との乖離を示すだけでなく、そうした乖離を埋めていくための憲法の理論、憲法解釈についても説明するものであるべきであろう。本書は、市民が憲法を活かしていこうと思えば、憲法感覚だけでは不十分であり、ある程度の憲法解釈の技量が必要であるという、すこぶる正当な問題意識に立つ正統派の憲法入門書なのである。

そして、私は、憲法現実に着目しているだけでなく理論的水準も高い本書を、既に憲法を学んでいる法学部生やさらには法科大学院生にも読んでもらいたいと思う。彼（女）らが、自分たちが学んだ憲法解釈論をその現実的背景との関連で正しく位置づけ理解できるようになることが、期待されるのである。

〔立命館大学教授 市川正人〕

